

BOOK REVIEW

頸損晩夏～創りつづけた頸髄損傷 35 年の生活の記録～

あなたは病気やけがで頸髄損傷を受傷したら、次の日からどのように生活していきますか。あるいはあなたが医療・福祉関係者だったらその方をどのように支援していきますか。本書は交通事故により高位頸髄を損傷した上村数洋氏が、家族と共に歩んできた生活の記録であり、同様の障害をもつ方々に生きる希望を届け、同時に支援者の方々に、福祉用具と、障害者に必要な細やかな医療ケアに関する生のニーズを発信しています。

前作『明日を創るー頸髄損傷者の生活の記録』(三輪書店, 1990) から通して読み、現在と比較してみると、受傷から 35 年で、国内メーカーの製品開発、介護保険制度の導入による福祉用具のレンタルが始まり、訪問看護ステーションやヘルパー派遣などの人的支援も少しずつ選択肢が広がってきました。しかし、人手もサービスの質もまだ十分ではなく、用具の面でも種類や細かいカスタマイズの点で十分ではありません。本書の先駆者たちは、ユーザーの声から出発したモノづくりと多職種チームによりさまざまな目から吟味することを 20 年以上前から実践してきました。しかも、現在のインターネット社会と違って、人づてに専門家を探し、電話や訪問で自分に必要な機器やサービスを探して、もしなければそれらを提供してくれる枠組みを自分たちで作ってきました。上村氏は 4 章にあるよ

うに、当時の県知事とパイプを持ち、行政や私たち支援者との関係づくりをしながら、必要なことを粘り強く説明し、説得し、社会制度や支援方法を障害者自身のニーズに合わせて変えていく努力をしてこられました。このことを伝え続けてほしいと思います。

同時に、本書は若い障害者たちに夢を語り、希望を託しています。自分たちが、道具やサービスを使いこなすことによって、毎日の暮らしが便利になるだけでなく、暮らしが広がっていくことを伝えています。また、通院、外出から就労、就労場所がなければ自分たちで創り出したり、いろいろな情報を得るために国内の学会に参加、自分も発表し、情報発信したりしています。海外への視察にも出かけています。

私たち支援者も教わることがたくさんあります。福祉用具の開発に携わっている立場として、本当に役に立つものを生み出していきたいと思います。共著の小島 操氏は長年、社会福祉士、ケアマネジャーの立場から福祉サービス供給の現場にかかわっており、畠山卓朗氏は、エンジニアとしてリハセンターの現場と大学で一貫して福祉機器の研究開発に携わった、それぞれ大先輩です。畠山氏は 2016 年惜しまれながら逝去されましたが、上村夫妻と著者たちの思いがさらなる続編に受け継がれることを期待しています。



● 上村数洋, 他
＝著

(B5/196 頁 / 1,800 円 + 税 / CBR/2017 年)

評者

畠中 規

横浜市総合リハビリテーションセンター研究開発課, リハエンジニア